

感染症病棟の疲弊 専門領域超え医師・看護師が応援派遣 コロナ禍で開院・国際医療福祉大学成田病院 “奮闘記”

3/5(日) 夕刊フジ

【コロナ禍で開院 国際医療福祉大学成田病院 “奮闘記”】

新型コロナウイルス感染症患者を受け入れる施設の医療スタッフは、実像が見えない対象と闘っていた。自分たちの提供する医療が本当に正しいのか、そこに過不足はないのか—という疑問を頭の隅にとどめながら、目の前の患者の治療に全力を尽くす。その疲労は想像を絶するものだった。【写真】 コロナ重症患者の搬送に追われる医療従事者。



風評被害にもさらされた

コロナ禍で予定より1カ月前倒しで開院した国際医療福祉大学成田病院（千葉県成田市）でも、心身ともに疲弊する職員が続出した。同院では、新型コロナウイルス感染症患者を受け入れるにあたり、感染症科のスタッフは外来を担当し、入院病棟は主に呼吸器内科が診る、という体制を敷いた。同院には医師のほか

にも感染症に関する専門的な知識を持つ認定看護師が2人おり、前倒し開院の時点で「いちおう最低限の人材はいた」（病院長の宮崎勝医師、以下同）しかしそれはあくまで“最低限”であって、潤沢ではない。とはいえ感染症病棟で働くことを希望しない看護師を無理に対応させることもできない。

「欧米でコロナ対応に当たっていた看護師が感染して亡くなる事案がたびたびニュースで取り上げられたことも逆風になりました」そのためコロナ対応はつねにギリギリの人員で当たらざるを得なくなり、身体的疲労に精神的な疲労が重なるようになる。結果として看護師の退職が相次いだのだ。当時、PCR検査を行うクリニックなどが続々と登場し、看護師は売り手市場。高額な報酬を提示するクリニックも少なくなかった。また、「とにかくコロナから離れたい」という思いに突き動かされて、美容外科などの自由診療クリニックに転職していく看護師もいたようだ。

「高度な知識を修得した看護師がこのような形で流出してしまうのはもったいないことですが、こればかりはどうすることもできなかった」辞めていくのは看護師だけではない。医師にも離職者が出た。「感染者を診療する科の医師は10人ほどいましたが、それでも過重労働が続く中でメンタル面での余裕がなくなり、医師同士の間でもギスギスした空気が流れるようになったのです。意見の衝突が続いた結果、離職する医師が出てきました。そのため感染症とは関係ない診療科の医師に、コロナ病棟の応援依頼をすることになるのですが、いま振り返ると、その判断をもっと早くすべきだったかと思っています」発熱外来や病棟などの応援に出る医師は最初は内科系の診療科が中心だったが、いまは外科系からも派遣されている。

感染症に関連する高度に専門特化された医療行為はできないが、感染症科医や呼吸器内科医の指導のもとで、“医師にしかできない業務”に従事している。

また看護師についても、「コロナ病棟と他の病棟とで入れ替えをしてもらった」という。こうした態勢が整ってきたのは、開院から1年、言い換えればコロナ禍が始まってから1年が過ぎた頃のことだった。（取材・長田昭二）